

(翻 訳)

エミール・デュルケーム (I)

(1858—1917)

I・M・ツアイトリン 著

山 田 隆 夫 訳

エミール・デュルケームの社会主義を理解するために、同時代の多くの人達の場合と同じように、その時代の社会主義思想や社会主義運動との彼の関係が検討されねばならない。周知のとおり、デュルケームは、1888年に、はやくも社会主義の諸問題に関心を示しはじめたが、それは、大著『社会分業論』の最初の計画の起草と大体同じ頃であった。彼は『分業』、『自殺』、『家族』そして、『宗教』を論じているうちに、はからずも、大規模な諸研究に進んでいったが、彼の関心は、社会主義から社会学へ、そして、主に、社会問題に移っていった。マルセル・モスが観察しているとおおり、関心の移動後にも、デュルケームは、自分の出発点¹を見失わなかった。彼は、1895年に、ボルドー大学で、社会主義研究を再開し、社会主義に関する一連の講演を開始したが、社会主義を、客観的にまた社会的に取扱おうとした。その主題とは、社会主義イデオロギーの諸形態をどのように説明したらよいか。サン・シモン、フーリエ、オーエンそしてマルクスらのそれぞれの理論の前進を促した社会的諸条件、圧力は、何であったかである。だから、デュルケームの社会主義研究は「観念の諸原因の分析」²になるはずであった。

デュルケームは、カール・マルクスの著書を含めて、社会主義的文献について、詳細な知識を持っていた。「フィンランドの一友人ナイグリックが、ライプチヒ滞在中のデュルケームに、マルクスを研究するよう勧めたのである。」(3頁, 訳, 10頁)。しかしながら、デュルケームは、生涯、社

会主義反対の態度をとり続けた。もっとも、彼の親友達、学生達は、マルクス主義の、ゲド主義の、そしてその他の、諸形態において、この社会主義に関係するようになった。モスによれば、デュルケームが嫌った社会主義の特徴は、「その過激な性格、多かれ少なかれ純労働者主義的なその階級的な性格、さらに政治的で、しかも政治屋的でさえある、その調子」のためであった。(3頁, 訳, 10頁)。こうして、デュルケームは、階級と階級矛盾にもとづく社会概念、社会変動概念に対して、「有機的連帯」論を前進させた。しかし、この有機的連帯論は、階級分裂の意味をまったくといてよいほど解かっていた。変動は、それが社会一般のためになる場合にだけ善いことであった。

デュルケームは、マルクス理論の批判的検討を含んでいる社会主義研究を完成したわけではない。しかし彼の他の著書と合わせて見ると、彼が仕上げたものは、マルクスのそれに本質的に対立する社会モデル構築への精進とみることができる。さらに、あとで検討するが、デュルケームの有機体的共感モデルは、彼がコントを批判しているにもかかわらず、この思想家に負うところが大きい。デュルケームは、コントの場合と同じように、社会主義者達の否定的・批判的哲学に対抗するために、実証的・構造的な哲学を提唱した。社会階級、階級分裂、権力と政治の矛盾についての諸問題は、デュルケームの「実証政治」にあっては、これっぽっちの役割も演じていない。

ところで、デュルケームは、コントから深い影響を受けていると述べることは、限定を付けなければならない。なぜなら、コントの主要観念は、すべて、サン・シモンに由来している（このことを、まず、デュルケームが証明しようとした）という、この研究のはじめに記録しておいた理由からだけでなく、さらに、デュルケームは、コントの遺産には愛憎なかなさる立場をとっていたし、この事実を自分の著書のなかで、間欠的に表明しているからである。A・W・グールドナーが適切に言っているように、デュルケームは、「ぎこちないコント主義者」(8頁)であった。

デュルケームの「連帯」への関心は、同時代の社会的・政治的矛盾につ

いての彼の不安に関連していた。社会主義運動の力強さと優越性、またその運動が提起した社会学的分析と解決とは、二つの卓越している理論体系、コント的とマルクスの間のある種の知的調停を探そう彼をかりたてた。この仕事を彼は、コント、マルクスの両人に共通の知的先哲であるサン・シモンの著書を探究することによって、成しとげようと試みた。そして、この探究は、デュルケームの晩年の思索の多くを先取りすることになった研究『社会主義とサン・シモン』において行なわれた。結局、彼が熱烈に求めたイデオロギー的な折衷案は、失敗におわり、実現しなかった。年代的にも、イデオロギー的にも、サン・シモンは二つの時期に跨がっていた。一方では、革命の時期、他方では、保守的反動の時期であった。マルクスが、サン・シモン思想の、前の時期に由来する要素を強調し発展させたとすれば、デュルケームは、サン・シモン思想の、後の時期に由来する要素を強調し発展させたのである。要するに、デュルケームは、サン・シモンにみられる保守的傾向を発展させたのであって、マルクスによって採用された急進的傾向には無知であった。全体としてみれば、デュルケームの体系は、きわめて保守的な偏向を帯びている。ときには、彼は、マルクスと同じやり方で、一つの問題に反応することがある。これは、彼の「マルクスへの収斂」³といわれているが、これが、一時的で表面的なものであるにすぎないことは、後ほど研究するとおりである。デュルケームは、「社会的存在が社会的意識を規定する」という。マルクスの主要な理論的命題の一つを用いることで、結局、マルクスに「降参する」(彼はこれを否定するが)ことは確かである。これは、その著書『宗教生活の原初形態』でもっとも明白になる。しかしながら、この本にあっても、彼は自分自身の目的のためにその理論を用いているのであって、一定の重要な点でマルクスと意見が相違している。(後ほど探究する予定である)。デュルケームが、如何にして、その保守的社会モデルを組み立て、発展させたかを見るために、サン・シモンと彼との関係を検討することから始めなければならない。

1. デュルケーム著『社会主義とサン・シモン』初版のマルセル・モスの序文を参照。A・W・グールドナーの紹介文をつけて出版されている。London; Rutledge and Kegan Paul Ltd, 1959) 日本語版に、『社会主義およびサン・シモン』デュルケーム／森博訳，恒星社厚生閣がある。
2. 同上，2頁，訳も同上の頁数。
3. 同上，グールドナーの議論，P. x x i i i。

デュルケームとサン・シモン

サン・シモンには、階級的矛盾が、封建的秩序からブルジョワ的秩序への移行において、重要な役割を演じている。しかし、新しい科学的・産業的秩序が確立してしまうと、階級的矛盾は、その意味を実質的に喪失する。彼は、階級・階層の存在が、新しい社会にもあると、認識したが、その新しい条件は、階層的であるけれども、それにもかかわらず有機的な、社会的平和と安定性をもった秩序に進んでいくことができると考えた。統合は、固有の道徳的観念を制度化することによって、はじめて成しとげられることであった。このことはまた、デュルケーム学説の指導的な観念に成った。新しい分業、すなわち、科学と産業とは、コントは、こうなることを恐れているようであったが、「解体」と「無政府」に進んでいく必要はない。サン・シモンにもデュルケームにも、固有の道徳的秩序が、新しい社会的・技術的諸条件に適合するため発展するかいなかに、万事がかかっていた。デュルケームが、サン・シモンに恩義を、どれくらい被むっているかが、サン・シモン哲学の基礎的原理を再検討することによって、さらに明白になってくるであろう。デュルケームが、自分の学問上の恩師と見なしている人は、サン・シモンであって、コントではなかったからである。デュルケームは、書いている。「実証主義哲学の観念、用語、概要ですら、すべてが、サン・シモンのうちに見出せる。それゆえ、今日コントに与えられている〔実証哲学の祖としての〕栄誉は、当然サン・シモンに与えられなければならない。」(104頁，訳，128頁)。これらのエッセイで、デュルケームは、この命題を、全力あげて擁護し、証明する。デュルケームが、

この事実を証明することは大切なことであった。サン・シモンの諸原理(デュルケームがもっとも上手に要約している)はすべて、デュルケームの著書に現われているからであって、事実、これらの同じ諸原理は、彼自身の社会学の基礎を形成しているからである。

道徳的観念は、サン・シモンにとっても、デュルケームにとっても、社会の実際の接着剤である。両思想家にとって、社会とは、とりわけ、観念の共同体である。「人びとを社会に統合しうる唯一の絆は、実証的な道徳的観念の類似性である。」(91頁, 訳, 114頁)。サン・シモンが、大革命後のヨーロッパ社会は、いかなる種類の道徳的体系を必要としているかを決定することが、彼の主要な課題であると見なしていたとすれば、デュルケームは、これと似たような光にあてて、自分自身の仕事を見ていた。すなわち、同時代のフランスの階級、階層、職業集団を、一つの連帯的な社会秩序に結合させる世俗的、道徳的体系を提供することであった。デュルケームは、サン・シモンに類似しているが、理論の役割を、本質的に実証的・構造的であると見なしていた。そして、哲学者達や革命家達の否定的・批判的世界観に対する、一定の軽蔑を共有していた。デュルケームは、現代の哲学は、構造的で、組織的でなければならない、批判的で、革命的であってはならないということに心から同意していた。しかしながら、構造化や組織性を彼が強調したことは、一般的には、社会主義、特殊的には、マルクス主義の批判的で革命的な観念に対する解毒剤として役立つことであった。

デュルケームを、彼自身の実証主義的で機能的な見解に導いていったのは、そして、彼の著書を通してわれわれが見出す有機体的類推と隠喩を鼓吹したのは、『社会生理学』やその他の著書で宣言されているサン・シモンの社会概念であった。デュルケームの基本的前提は、これを彼は繰り返し述べているが、「社会」は諸個人の単なる寄せ集めではなく、独自の实在であるということであって、既にサン・シモンが、明白に規定しているところである。

「社会は、個々の個体の気ままな意志のみを原動力として行動し、取るに足らぬまとまりのないさまざまな偶然の出来事しか生みださぬ、もろもろの生き者の単なる集合ではない。反対に、社会は、とりわけそのあらゆる部分が異なった仕方で全体の進行に参加している一つの真に有機的な機械である。人間の結合は一つの真の存在をつくりあげるものであって、その存在はそれらの諸器官が託された機能をより多くあるいはより少なく規則的に果たすにしたがって、より強くもあり、またより弱くもある。」(『社会生理学』、第10巻、177頁)。(99頁、訳、122—123頁)。

さらに、デュルケームの進化論的社会概念は、サン・シモンの「進歩の法則」が先取りしている。人間は、この法則の道具であって、その作者ではないとするサン・シモンの強調は、デュルケームが個人を取扱う際に、また、デュルケームが社会と社会過程を具象化(時には、物神化)する際に、やはり重要なテーマである。両思想家にとって、社会法則は、絶対的必然性を持って人間を支配し、人間が出来ることといえば、服従することだけである。人間が希望しうる最善のことといえば、この法則の過程あるいは方向を発見すること—これが実証科学の課題である—、したがって、この法則に適合することで、苦痛をできるだけやわらげることである。

サン・シモンは、封建的・神学的体制の胎内に発生した科学的・産業的秩序の起源を、基本的に弁証法的方法で、描いている。この相矛盾する両体制は、共存できないことは確かなことである。そして、この緊張と葛藤とは、つまるところ、フランス大革命になった。大革命以後の葛藤と無政府とは、新しい科学的・産業的条件に妥当する宗教的・道徳的秩序を発見し、押しつけることによって、廃絶できよう。このことは、『新キリスト教』を、サン・シモンが要請するところに進んでいった。

デュルケームが、基本点で、この見解を採りいれていることは明白である。とくに、『分業論』では、「機械的」連帯が、「より高い」連帯、いわゆる「有機的」連帯に道を譲ることになっている。両思想家は、旧社会秩序が矛盾する原理、階級、階級利害に立脚しているとみたので、彼等は、彼

等のめいめいの、より高い、有機的社会から矛盾を除かなかった。新しい社会の矛盾については、正常なものはなにもなかった。階級や階層の存在は、社会全体の道徳的統一や連帯を妨げなかった。サン・シモンが自分の課題としたこと、すなわち、普遍的に容認しうる道徳的・合理的信念の、新しい固有の集大成を仕上げることは、サン・シモンの時代には、まだ未完成のまま残ってしまっているとデュルケームは信じている。彼はサン・シモンと同意見であった。旧秩序は再興できないであろう。だから、新秩序は「統合」されなければならないことになる。これこそは、経済的、政治的危機の再来、慢性的な、怒りと不満のムード、つまり、社会の「非統合」を避けるために基本的なことであった。サン・シモンが心中に描いていた「革命」は、当時は、まだ不完全である、その理由は、現代の分業に固有な新しい統合する制度が、まだ確立していないからであると、デュルケームは確信した。新しい法律と道徳とが、産業社会の多様な色合いや変化を表現するために、さらに、その産業社会の諸部分と諸機能を統合するために、発展させられなければならない。

このことは、デュルケームには、容易に実行できるように見えた。彼は、サン・シモンの産業社会に関する見解を、統一させ平和にする力であると認めていたからである。サン・シモンの見解を描きながら、デュルケームは書いている。「人間精神は、かつてそうであった軍事志向的なものから、平和志向的なものになった。産業は、諸国民を豊かにしその境遇を改善するための手段を——かつての戦争が与えてくれたのと同じほど——豊富に与えてくれる」。(130—131頁, 訳, 157頁)。古い封建的、軍事的、そして、神学的諸機能が、その意味を失ってしまうと、新しい「有機的」社会での社会矛盾の明白な存在根拠がなくなってしまう。旧制度の矛盾の主要源泉は、封建的階級と産業的階級との矛盾する利害と原理であった。——それゆえ、この「有機的」性質を実現するために、新しい社会は、これらの諸原理の唯一の原理に基礎づけられなければならなかった。デュルケームは書いている。サン・シモンによれば、「近代社会は純粹に産業的な基礎のうえに完全に組織された時にはじめてはっきり均衡を保つであろうとい

うことである。」(131頁, 訳, 158頁)。デュルケームは自分の先生と同様に、多くのかつ多様な職業集団(諸機能)の間にだけでなく、産業資本家達と労働者達の間にも利害の同質性を見た。彼は、サン・シモンの定式を採用した。すなわち、「有用な事物の生産者が社会で有用な唯一の人間であり、彼等がこの新しい産業社会の進路の規制に協力すべき唯一のものである。」(134頁, 訳, 161頁)。このことが、デュルケームが「職業ギルド」に与えた役割の基礎を形成していた。サン・シモンの議論によれば、不労所得で生活している人々だけは、正常の社会の埒外に位置づけられなければならない。「自分達の富をみずから生産的なものにし、自分達の労働によって富を豊かにしている人達についていえば、彼らは生産者である。それゆえ、産業社会は、経済生活に積極的に参与しているすべての者を含むものであって、所有者であるか否かは問うところではない。」(訳, 162頁)。デュルケームの見解といっても、サン・シモンのそのパラフレーズ〔義解〕にすぎない。生産手段を所有する者と所有しない者との間に、利害の必然的な矛盾など存在しないというのだ。それだから、階級の存在が、有機的連帯の基礎を提供しえないという理由などなかったのである。

デュルケームは、構造的不平等性に立脚する産業制度の若干の不公平を記録していることはまちがいない。けれども、この不公平は、彼の体系のきわめて一部を占めているだけである。彼は、これにときどき注意をしているにすぎない。分業が成長すれば、統合が結果するというデュルケームの理論もまたサン・シモンに由来している。デュルケームが、サン・シモンの図式に、基本が既に現われている観念を、その『分業論』で仕上げたことは、『産業体制論』からの以下の抜粋を見れば解るであろう。この著書や他の著書で、サン・シモンは、分業の成長は諸個人の相互依存と相互責任を大きくし、さらに、社会全体への依存を大きくしていくであろうという立場を採っている。

「文明が進歩するにつれて、精神的な面から見ても、世俗的な面から見ても、分業が同程度に増大する。こうして人々は、個人的に他の人々に依存

することがより少なくなるが、しかしまったく同じ関係においてより多く全体に依存することになる。……よく秩序づけられた体制の組織は、諸部分が全体に、強固に結びつけられ、従属することをぜひとも必要とするからである。」(138頁, 訳, 166頁)。

デュルケームが、しばしば繰り返している職業的ギルドと、協同組合の統合する役割に関する観念ですら、最初は、サン・シモンが表現したものである。分業の結果によって産業社会の連帯が実際に存在するためには、あらかじめ、「国民のきわめて広範な部分において、諸個人が多少とも数多くの、また相互に結びつけられた、産業的連合体に組み込まれていること……これが諸個人を一大産業的目標に導いていって一般的体制を形成するのを可能ならしめること」が、必要であった。(『産業体制論』第6巻, 185頁) (139頁, 訳, 166頁)。デュルケームは、サン・シモンと同様に、産業体制は、固有の統一性を持っていると見ている。サン・シモンの概念を要約しながら、デュルケームは、自分自身の考え方と同じであると記述している。つまり、デュルケームの見解では、分業が成長すると、社会の全ての諸階級(「諸部分」)間の利害の連帯に進んでいくことになる。諸階級は「諸機能」と呼ばれ、矛盾するものとしてではなく、調整的、協同的、そして、統一的と見なされるのである。デュルケームは書いている。「今日それぞれの国民が一つのまとまりある全体をなしているのは、それらの国民があれこれの職分または階級に同一化する習慣を身につけたからではなく、彼らが相互に切り離しがたく結びつき互いに補完しあっている諸機能の体系だからである。」(148頁, 訳, 176頁)。

仮に、産業体制が諸機能の一つの体系であるとすれば、調和のとれた作業を保障するのにどうしても必要なことは、適切な規制である。ここでもまた、デュルケーム理論の基礎は、まずサン・シモンに現われている。デュルケームは、彼の先生が提唱した実証主義的公式に敏感である。後で見ると、彼は道徳的価値の科学的規定を心から確信していた。彼はサン・シモンの公式を肯定的に要約する。「新しい社会では、指導するのは最

も強いものではなく、科学または産業において最も有能な者である。彼らがそのような指導の役割を当てがわれるのは、彼らが自分達の意志を他人に実行させる力をもっているからではなくて、彼らが他の人達よりも物事をよく知っているからであり、それゆえ、彼らの職能は自分たちの欲することを述べることにではなく自分達の知っていることを述べることにある。彼らは命令を下さず、ただ事物の本性にかなったことだけを告知させる。」(150頁, 訳, 178頁)。さらに、繰り返せば、「指揮する者は指揮される者の上に立つものではない。前者は後者に優位するものではない。前者は後者と別の職能を果たすものであり、ただそれだけである。」(151頁, 訳, 179頁)。

サン・シモンにとって、事態をこう述べることは、一定の基本的不平等——出生による一切の権利の——「あらゆる種類の特権」さえの——設定を廃絶することを予定していた。(151頁, 訳, 179—180頁)。デュルケームがこの見解を共有していたこと、さらに、遺産相続制度が平等への障壁となっていると見なし、不公平と矛盾の源泉と見なすところに進んでいったことはまちがいないが、これは、彼の体系ではさほど重要ではない側面であるにすぎない。これを彼のテーゼの中心テーマにすることは、マルクス主義者や他の社会主義者への条件付降状を意味するからである。マルクスは、階級と階級分裂との廃絶が、人間の真の共同体の発展の前提条件であると考えていたが、デュルケームは、階級分裂が存続している場合にも、このような共同体を想像していたという印象は、避けられないのである。

さらに、デュルケームは、サン・シモンと自分自身との両方の体系にある権威主義的意味を生涯理解できなかつた。両思想家は、平等について語ったが、両思想家は階級構造をそのまま残してしまつたし、同時に、「新しい」産業社会では、言葉の公認された意味でのいかなる政府も存在しないであろうと信ずると告白している。「無政府主義的」とか、「非権威主義的」という用語は、新しい社会に関するサン・シモンのヴィジョンを描くために、デュルケームが使用したのであろう。そして、この用語を彼が使用することは、一定期間に惹起した歴史の発展の光にてらしてみると、現

代の読者には特に皮肉に、いやグロテスクにさえ見える。彼は書いている。「新しい社会は首長を持たない。各人はそれぞれ占めるのが自然な地位につき、事物の本性によって命じられる以外の行動を行わない。」(153頁, 訳, 181頁)。権力と強制とは必要ないであろう。科学だけが、再組織される社会で認められる権威であって、事実、社会的諸機能の全ての自動的調和を可能にするのは科学である。科学は、なによりもまず、どのような道徳的観念が、新しい産業的条件に最も適するかを教えるからである。

サン・シモンは、新しい社会が彼の望むとおりに出現するためには、一定の財産関係の変化が必要であると考えたことは事実である。彼は書いていた。「所有の変革なくしては、社会秩序に変革は決してありえない。」『ヨーロッパ社会の再組織について』(157頁, 訳, 186頁)。けれども、彼のポイントは、才能と所有との分離を避けることであった。デュルケームもまた、社会秩序を能力に依存させようとした。階級と階層とは残るであろう。ところで、今日、例えば所有者は恐らくもっとも有能であろう。——即ち、当然有能なのである。あとで、デュルケームは、世襲制廃止を示唆しているが、所有は自然の能力から切り離されないであろう。

デュルケームは、著書のいたるところで、「エゴイズムと闘え!」と指示している。自由に放任されたエゴイズムは、結局、「必然的に社会の解体に結果するからである。」さて、これらの言葉は、サン・シモンのものであって、初めは『産業組織論』に現われている。デュルケームがエゴイズムに対する最善の解毒剤と考えたもの、すなわち、「社会」に対する愛他主義的道徳的コミットメントは、サン・シモンの『新キリスト教』に由来している。「人類愛」こそサン・シモンの標語であった。「キリスト教の聖なる創始者によって確立された根本原理は、すべての人間に、互いに兄弟とみなしあい、互いの福祉のためにできるだけ最も完全に協同し合うように命じる。この原理はあらゆる社会的原理のうちで最も一般的なものである。」(『産業体制論』)(165頁, 訳, 194頁)。今日、必要な道徳的大改革の真の課題は、まさに「世俗的権力をこの聖なる公理にしたがって組織すること」にある。(訳, 194頁)。新しい慈愛と博愛とが、要請されるとサン・シモン

は強調する。それは、「自分の腕による労働以外には何らの生存手段を持たぬ階級の境遇をできるだけ最大に改善する」ためである。(166頁, 訳, 195頁)。このことは、それ自体のためばかりでなく、社会平和のために重要である。サン・シモンにとっても、デュルケームにとっても、プロレタリアートに暴力によって社会秩序を強制することは、全く不可能でないが、困難であり、高くつくことであるということが問題であった。それゆえ、デュルケームの言葉でいえば、「彼らに社会秩序を愛させること」がさらに望ましいことである。(166頁, 訳, 195頁)。デュルケームは、サン・シモンの教説（そして自分自身の教説でもある）のこの側面を正しく観察している。「教説のこの部分全体を鼓舞している感情は、惨めな人々への憐れみと、同時に彼らが社会秩序を侵害しうる危険への懸念である。」(168頁, 訳, 198頁)。

デュルケームは、さらに、もう一つの点でもサン・シモンに従っている。すなわち、道徳的感情の統合する役割という点である。彼は、分業がより高度な連帯に導くと論ずるときには、人々が相互にますます依存するようになるという意味において論じているにすぎない。しかし、彼は同時に認めている。このいわゆる相互依存は、実際の連帯を惹起するのに不十分である。——それは、「全体としての社会」への道徳的教育とコミットメントをとおしてのみ効果的になりうるからである。またしても、サン・シモンに従っている。

デュルケームのサン・シモンをめぐる議論では、そのイデオロギー的コミットメントが、はっきり浮びあがってくる。彼は、動揺、社会矛盾、そして「無政府」を軽蔑し、恐れた。現代人の飽くことを知らない欲望は、その病的状態の徴候であろう。ボナール、メーストル、そしてサン・シモンと共に、デュルケームは、宗教の影響力が衰えると、道徳的真空を残してしまうであろうと確信した。接着力のある道徳が必要であった。社会平和は人々が、その運命に満足しないかぎり、実現しないからである。デュルケームは書いている。「社会秩序が君臨するために必要なことは、大多数の人が自分達の境遇に満足することである。しかし、彼らが満足するのに

必要なことは、彼らがより多くまたは、より少なく持つということではなく、彼らが自分達はより多く持つ権利を持たないのだと納得することである。そして、そのためには、彼らが優位性を認めるところの、そして彼らに正当になしうることを告げるところの、権威が存在することがぜひとも必要である」。 (200頁, 訳, 233頁)。つまりところ必要なのは、種々の「機能」を緩和し、規制し、「エゴイズム」と特殊利害を拘束することができる一種の強力な道徳力である。デュルケームは、専門家の、職業人の、集団化が、この道徳力を行使したり、同時に、個人と国家を仲介するために、結局は、形成されなければならないという、特別な解決を提唱したが、その日が到来するまで、彼は、「社会」に対する全面的な忠誠を求める覚悟であった。この忠誠は、このような事情では、「国家」に対する全面的な忠誠を意味するだけであろう。要するに、彼は、偉大な「全ての戦争を終らせる戦争」で、フランスの観点を擁護するためにペンを執ることになっていた。他方、彼の親友たちのなかのいく人かは、特にジョレースは、このような教説の愚かさや惨禍を暴露しようと試みた。

デュルケームは、マルクスが提起したものとは全く別のやり方で、社会問題を提起しようとした。このことが、保守的、権威主義的イデオロギーになっていた。これがデュルケームの社会学的全体系を支配した。彼は確信した。

「私の問題提起のやり方は、もはや、階級の問題を持ち出して、侃侃諤諤の議論をすることをしない。それは、唯一可能な解決は他方の取り分を増やすために一方の取り分を減らすことにあるといったぐあいに、富者と貧者に、雇主に労働者に、対立させない。そうでなく、お互いのために、上から欲求を意識的に抑制する制動機の必要を主張し、こうして社会的活動から生まれるのではなくて、社会活動を苦しめさえするところの、放恣の、興奮動揺の、病的な不安の、状態を局限する。換言すれば、このように考えられた社会問題は、金または力の問題ではなく、道徳力の問題なのである。問題の主調となるものは、われわれの経済の状態ではなく、はるかに多くわれわれの道徳の状態である。」 (204頁, 訳, 238頁)。

この見解が、デュルケーム社会学を支配していることは、彼の主要著書を検討すれば、文献的に証明されるであろう。

この「エミール・デュルケーム (I)」は Irving M. Zeitlin, Indiana University, IDEOLOGY AND THE DEVELOPMENT OF SOCIOLOGICAL THEORYのPARTIV, Chapter 15, Émile Durkheim の Durkheim and Saint-Simon の節の訳である。この15章は

Durkheim and Saint-Simon	P. 236
The Division of Labor in Society	P. 242
Professional Ethics and Civic Morals	P. 252
Education and Sociology	P. 257
Moral Education	P. 266
The Rules of the Sociological Method	P. 267
Suicide	P. 271
Elementary Form of Religious Life	P. 276

以上の諸節から成り立っている。漸次訳出されるであろう。

I・M・Zeitlin のこの本は、PART I～PART IIIまでは、『社会学思想史—イデオロギーと社会学理論の発展—』(上)として、風媒社版にて訳出されている。PARTIVのMAX WEBER, VILFREDO PARETO, GAETANO MOSCAの章は、それぞれ『阪南論集, 社会科学編第17巻3号～第18巻2号』と、『阪南論集, 人文・自然科学篇第18巻1号～3号』そして、『阪南論集, 人文・自然科学篇19巻2号』, また『中京大学・教養論叢第26巻第3号』に訳出されている。さらに Robert Michels の章は、『中京大学・教養論叢第26巻3号』に翻訳されている。

IDEOLOGY AND THE DEVELOPMENT OF SOCIOLOGICAL THEORY by Irving M・Zeitlin, Original English Language Edition Published by Prentic-Hall Inc.

Englewood Cliffs New-Jersey U. S. A. Copyright © 1968 by PRENTICE HALL, Inc. Japanese translation rights arranged with prentice-Hall Inc. New Jersey through Oralas E. Tuttle Inc., Tokyo.

目次

序

第I部 啓蒙

- 一 啓蒙——哲学的根拠
- 二 モンテスキュー
- 三 ルソー

第II部 大革命後の思想

- 四 ロマン的・保守的反動
- 五 ボナールとメーストル
- 六 サン・シモン
- 七 オーギュスト・コント

第III部 マルクスの流れ

- 八 哲学の方向
- 九 社会哲学から社会理論へ
- 十 マルクスの疎外労働の社会学

第IV部 マルクスの亡霊との闘争

- 十一 マックス・ウェーバー
- 十二 ヴィルフレド・パレート
- 十三 ガエターノ・モースカ
- 十四 ロベルト・ミヒエルズ
- 十五 エミール・デュルケーム
- 十六 カール・マンハイム

エピローグ

以上